

## 聾幼児と言語指導



松 沢 豪

### (一)

耳が聞えない為に、ことばを持たない聾幼児に、どのようにして、ことばを教えたらよいのでしょうか。

聾児は、言語受容の中心的な入口として聴覚の代りに視覚を用います。即ち話し手の口の形の動きを契機にして話される言葉を視覚を通して理解するように導かれるのです。そしてこれを「読話」又は「読唇」といって

ます。

家庭又は聾学校幼稚園において、初期の読話は、次のように指導されます。

幼児の日常生活の中には、その子供について、さまざまな出来ごとがありますが、実は、この出来ごとこそ、読話指導の機会なのです。

子供は、食べたり、寝たり、起きたり、はばかりにいたり、外出したり、遊んだり、おふろに入ったりします。そうして、これらのことは、たいていその母親の世話のもとに行われます。これらの時に母親は、いうでしょう。「オイデ、ゴハンヨ」「ヨシオチャン、ネマシヨ」「ヨシオチャン、オキマシヨ」「ハバカリニ、イキマシヨ」「カオオ、アライナサイ」「テオ、アライマシヨ」「カイモノニ、イキマシヨ」「オフロニ、ハイリマシヨ」「タオルオ、トツテチヨ」「ダイ」等々。聞える幼児でも、こういう場合に、母親のいうことばの、総てを理解はいたしません。然し、母親は、子供と一しょに話しかけたり、笑いかけたり、歌ったりすると、止めはしません。そして、ついには、そのような行為が繰り返され、母親のことば

が繰り返されている間に、母親のいうことばを、だんだん、はつきり理解してきます。

私達も同じように、これを聾幼児になさねばなりません。聾幼児の読話の発達段階に沿ってこれを具体的にのべましょう。

子供が玩具の自動車を持って遊んでいる、絵本を見ている、積木をしている場面を想像して下さい。親や教師は、一しょに遊んでもいいし、かたわらで笑顔で子供のすることを眺めていてもいいでしょう。子供は、自動車のネジの巻き方が分らなったり、絵本の中で特に興味のあるものを見たり、積木をうまく積んだりした時等のように、分らない、自信がない、不安を感じる、或いは、特別の関心や興味がある、更には満足感や、成功感を覚える時、フト、そばにいる親や教師の顔を見ます。その顔や目は、「ドースルノ?」「コレボクモツテルヨ」「デキタヨ」「ウマイデシヨ」などのことを、語っています。親や教師は、すかさず「ソレワ、コースルノヨ」「ソレネ」「ウマイネ」などと話しかけながら適当に、相手をします。

初期の言語指導は、実にこういう場面をのがさずに取り挙げることにあります。

が、何かを教えようという指導の意識は、表面に出さない方がよいのです。親や教師が指導の意識を表面に出すと、子供は、反撥したり、逃避したりします。私達の話しかけは、子供の遊びを、よりおもしろくし、子供を勇気づけるものでなくてはなりません。

こうして、子供が私達の顔を見る機会を逃さずにとらえて話しかけると共に、洗面、手洗い、食事、入浴、着衣、等日常必ず経験する出来ごとにおいて「カオオ、アライマショー」「テオ、アライマショーネ」「オフロニハイリマショー」「ヨーフクオキマショー」など話しかけてから、まず親や教師がその行為をやつて見せ、も一度話しかけて、同じように、行爲させていると、最初(一)「ばく然と親や教師の顔を見ていた」子供の目が、やがて、親や教師の口の形の動きは、何かを訴えていることを知り、(二)「親や教師の表情や口の動きから手がかりをつかむために、目的をもって顔を見る」ようになります。そしてその場面の生ずるごとに、同じことばが投げかけられていると、ついに子供は、話し手の口の動き、話し手の表情、具体的場面から類推して、(三)「口の動きに、ある意味を結合す

る」ようになります。

こうして、子供に親しい日課に關係のある語、句、文の認識が読話の最もやさしい段階であります。第二の段階は、日課の読話において経験した語や句や文を、新しい今までと違つた場面で使用して認知させることであります。

さらに第三の段階は、発音における子供の発達が、口声模倣(親や教師のいうことばをそれらしく口を動かしていうこと)をし始めて、物や人の名前を知りたがる時に達せられます。例えば、子供が物を示すかも知れませんが、子供は、物の名前を知りたいのです。彼は、はつきりそこに、ことばを見ようとして注意深く、親や教師の顔を見つめます。彼はこれを知りたい為に、新しいことばを読話しようとするのです。こうしてことばの読話の語イ(彙)は増していきます。

注 (一)(二)は初期の読話の発達段階です。

## (二)

以上のように、幼児の毎日の生活の中に置いて生ずる自然の機会をのがすことなく、巧みにとらえて指導される読話を、私は、一般

読話」と呼んでいます。これに対して読話の指導の系統を、段階的に追求するよう計画された意図的な読話指導を、一般読話と相呼応して行う必要があります。そして、これは私は「特殊読話」と呼んでいます。続いて、「特殊読話」について述べましょう。

物に名前のあることもまだ知らない二、三才の聾幼児の「特殊読話」は、次のような感覺訓練から始められます。

母親や教師は、まず二つの玩具を子供の前に置き、その一方と同じ玩具又は絵を子供に示し「コレワ、ドレ」といいます。子供が示された玩具又は絵と同じものをさし示したら「ソーソーウマイネ」といって、笑顔でほめてやります。

さし示すことが出来なかつたら、こちらで子供の代りに「ハイ」といって、同じものをさし示します。そして同じようにまねさせます。次は他方の玩具又は絵を示し「コレハドレ」といいます。そして同じように「ハイ」といってさし示めさせます。二つで出来るようになったら、三つ四つと玩具の数を増します。

このような遊びは、色紙や色毛糸やリボンなどで、色合わせとしてやったら次は、円、三角、四角の形合わせとしてやります。

ロ、細かな部分の違っている単純な品物や玩具の絵を識別する。

子供の親しみ深い、動物や乗り物の絵や、日常生活に密接な関係のある衣類や、食事の道具などの絵を、大きさは同じで、色か模様を少し違えて、一対ずつ数種作っておいて、その細かな差異を識別させるのです。方法は「イ」と同じようにします。

ハ、瞬間的に見て、絵や色や形を識別する。

「イ」「ロ」で述べた材料の二つか三つを子供の前に並べて、それに対応するもの一つを子供に瞬間的に見せて、それを識別させるのです。

以上「イ」「ロ」「ハ」の出来る子供は、読話のレデネスが出来ていると考えてよいでしょう。

ニ、口形と実物や絵又は動作を合わせる。

最初二枚の絵例えば牛と犬を用意します。一枚を、子供に見せて「コレワワンワンデスヨ。」といっている子供の前におきます。同じように、もう一枚を「コレワモーモーデスヨ。」

といつてこれも子供の前におきます。そして「ワンワンドレ。」といいます。子供が、だまっていたら指導者は「ハイ」といつて犬を指します。もう「一度ワンワンドレ。」といえます。子供が「ハイ」と犬を指したら「ソーウマイネ。」と、ほめてやります。このようにして、二枚が確実にできるようなつたら、もう一枚増して三枚で行います。

こうして子供は、物に名前があることを知ると共に事物を読話出来るようになります。また「……ワドレ」という問になれたら「……オミセテ。」「……オチヨーガイ。」「……オ

トツテ」というような問い方に進みます。読話の語彙が二、三十になったら、形容詞

(アカイ、アオイ、シロイ、等の色名、大キイ、小サイ、アツイ、ツメタイ、タカイ、ヒクイ、ナガイ、ミジカイ、重い、軽い、等)十名詞の形の読話(大キイボールワ、ドレデスカ等)に進みます。

口形と動作のマッチングは、最初太鼓を「ドン」と一つたたいたら立たせませす。「ドンドン」と、リズムカルに叩いたら歩かせませす。この合図を理解したら、次に太鼓を叩く代りに「タツテ」といつて立たせませす。「ア

ルイテ」といつて歩かせませす。そして「ドンドン」と乱打して「ハシツテ」「トンン」と間をおいて叩いて「トンド」という命令語を指導します。そして、これらの動作語が読話出来るようになると「ユックリアルイテ」「ハヤクハシツテ」というように、副詞+動詞の形の読話に進みます。即ち口形と動作を合わせる指導を纏めて申しますと、

1、鞆児の感覚を通して、ある合図を理解させること(合図そのものを、はっきりさせるためには、鞆児の振動感覚や視覚に訴えたがよい。)

2 その合図を口の形(ことば)におきかえること。

3 口の形にあらわれることばの合図の区別を分らせること。ということになります。

以上のような、指導によって、初期の読話の語彙の建設は、名詞、形容詞、動詞、副詞と進めていきます。

(日本聾話学校幼稚部主事)

× × ×